

釣れ釣れなるままに

2001年思い出の釣行記 PART. 5

山甲巡り

鹿島釣狂

☆開催日	平成13年10月14日		
☆開催場所	様似港～エリモ港		
☆入釣場所	エンルム岬		
☆潮	満潮	00:17	123cm
	干潮	07:17	38cm
☆釣果	カジカ	378mm	3
	アカハラ	337mm	2
	重量	3440g	
☆成績	合計点数	1059	点
	成績	3	位
	持ち点	3	点
	累計点	51	点 (21. 1. 17. 9. 3)
	4回計	30	点
	年間	7	位



入釣禁止

バスに乗り込みいざ出陣と本日の山中釣行を思い回らしていると、大前事務局長より本日の大会場所についての説明があった。

「山中・ルランベツ方面が道路の拡張工事のためにバスの停車が危険ですので、琴似バス停から幌満までは入釣禁止とします。」

それではと、琴似バス停で降りて入釣目的の山中へ移動しようかと質問する。

「徒歩で移動しての山中入釣は可能ですか？」

「今、琴似バス停から幌満までは入釣禁止ですと申し上げたばかりです。」

会員の安全を守ろうとする事務局長としての毅然とした態度を示すものとして重く受け止めざるを得ない。山中への入釣予定を変更せざるを得なくなる。

山中の手前の琴似に前野氏と阿部氏が入釣すると聞き、5回大会と同様について行こうかとも思う。以前、琴似のイクス前に降りた時はパットした成績を収めることができなかったのでリベンジの意味合いもある。

この時期、様似はどうであろうか？ 以前、エンルム岬の左側で大物賞をいただいた記憶が蘇る。台風の後波が残る大荒れの中、様似港で降りたが獲物がなく、仕方なくエンルム岬の左根っこについた舟揚場で竿を出した。これが功を奏してアブラコの大物をあげ身長優勝することができたのだ。この時期、柳の下の二匹のドジョウはいないと思われるが、港の中でアカハラの嫁をとり、エンルム岬でカジカ、あわよくばアブラコをと目論み、様似の状況を仲間に尋ねる。

「様似は、全く魚がないぞ。先週の釣り大会では皆ボンズ状態であった。頼みのアカハ

ラさえも港から出て行ってしまったらしい。」

しかし、他に思い当たる場所は入釣経験もなく不安なこともあり、最終的に様似に向かうことに決断する。条件は悪くともエンルム岬の櫛の歯状の溝の中で大きなカジカを取るというイメージを膨らます。暗いうちは岬の左に付いた舟揚場でアカハラを狙うとしよう。

何やら吉井氏が様似で降りるということで心強い。しかし私が狙っているところとは場所が違らしい。大転けするかもしれないが一発出たら大きいということらしく如何にも吉井氏らしい発想だ。

坊主は免れる

国道が新しくなり、降り口を確認しているうちにバスが会所前を通り過ぎてしまった。300mぐらい進んだところの枝道で降ろしてもらおう。二人並んで進んで行くと、吉井氏が様似川河口方向に向かうために、防潮堤についてのハシゴを降りて行く。寂しくなるが一人もまたよし。

まずは舟揚場前で荷物を下ろし、ドボンとアカハラ仕掛けを打ち込むが、しばらくアタリのないまま時が過ぎて行く。漆黒の夜空を見上げるとオリオンが輝きを増し、普段は見ることのできない三つ星の下にある星雲がボツと霞（かす）んで見える。東の空には悪魔が持つ鎌のような三日月が淡く光っていた。10月の声を聞いた。しかも満天の星空である。風は北から吹いて来ているにもかかわらず寒さをさほど感じさせない。海から返ってくる仕掛けの鉛もなぜだか生温かく感じる。この海水温の上昇のために、一度岸寄りしていたカジカが沖に出て行ったらしい。その代わりに温かくなった海辺にアカハラが戻って来ていることも考えられる。

根気よく打ち返して2時間ほど経ったころようやく近投の竿にアタリが出た。30cmほどのアカハラが白い腹を見せて上がってきた。秋の太平洋のアカハラは体の割に顔が小さい。腹に子を抱えるためかでっぴり感がある。続けて20cm程のハゴトコも4匹上がった。

惨めな尻尾

その後、遠投の竿に小さなアタリが続いていたが、大きな引き込みがない。ハゴトコの小物でもついたのでだろうとリールを巻くと何やら重い手ごたえである。竿を通して僅かだが首を振る様子も伝わり、じんわりと寄ってくる。慎重に寄せて波打ち際にキャップライトの光を向けると、40cmを優に越えるアブラコである。ゴツゴツとした岩の上に乗せて獲物に近寄る。

が、しかし、しかしである。手に触れた魚体はヌルツとして生あたたかく、妙にグニュグニュと軟らかい。この嫌な感触でゾクツと背中に悪寒が走り思わず手を放した。足元にどさっと落ちた大物はドンコ（クサウオ）である。アブラコの凜とした尾鰭はなく、小さく惨めな尻尾（しっぽ）がついている。喜びが大きかっただけに苦々しい思いで軍手をはき、やっとの思いで針を外し、「俺の針には食いつくな」と言いわたす。しかし、奴は大き

な体に似合わず小さな目玉で物悲しく如何にもすまなそうに見つめ返してくる。素早い泳ぎは出来ないはずの奴がこれまで大きくなるには様々な苦難を乗り越えてきたに違いない。海草類を常食とし、必要な動物性蛋白質は、たまたま目の前を通りすぎる獲物をニヤケたような大きな口でこっそりと唾え込んでいたものだろう。あの軟体動物のような体から想像すると海にふわふわと漂うクラゲでも食していたのだろうか。

クラゲはクラゲで遅く、10億年という長い生命の歴史を持つという。成長途中のポリプと呼ばれる状態のときに、すり鉢で体をすりつぶされても再生する強い生命力を持っているとも聞く。波間にゆらゆら浮遊する姿を、激変する社会側で生活する私たちから見れば、夢のような世界に漂う理想郷のイメージを彷彿させるのだが……。

それを食している（私の思い込みだが）となると、なんだか哀れに思い、静かに渚に返しておく。もう一度食らいついてきたら怒り心頭に達するので、その場から離れ移動することにする。

物悲しげな瞳

舟揚場から右方向の岩場に移動する。頭上にはエンルム岬の岩壁がオーバーハングし、足元にはまだ崩落したばかりと思われる岩が転がっている。なるべく岩壁から離れたところで三脚を立てた。2本はカジカを狙ってイカゴロ天秤仕掛けを近投、1本はアブラコを狙って1本針仕掛けを遠投とする。どちらも根がかりが激しい。

よいアタリが来た。砂が咬んでいるのか根がかりの少ない所に投げ込んでいた竿からだ。上がってきたのは先程の物を少し上回る程度のアカハラである。

しかしその後、またまたドンコである。先程の物よりは遥かに小型だが次から次へとやってくるようになった。そしてどれもが物悲しい目で見つめてくる。白っぽくぬるっとした魚体についた黒い瞳で暗い海底の餅をじくじくと捜し回ったのだろう。瞳孔を一杯に開いているのが妙に印象的で哀れを誘う。

衰れた肉体

潮が引いて前方の盤が大きく出てきた。東の空も僅かに薄明るくなってきており、目を凝らしてよく見ると随分と海が浅い。今まで一生懸命打ち込んでいたところは30cmにも満たないようなところばかりである。どうりで根がかりが多かったはずだ。

呆れて、岬の先端に移動することにした。先端に向かう途中で何か滑る物を踏んづけてしまったらしい。スパイクを履いていたにもかかわらず、ズルッと足元が滑り、その場に転んでしまった。よく見るとスパイクの足元を滑らせた犯人はこれまた大きなドンコである。いつからここにあった（絶命しているのです）のであろうか。私が来てからは釣り人の姿が見えなかったのだから、昨日からのもの（絶命しているのです）であろう。満潮時にも流されなかったのだから、昨日からの波は穏やかであったことが予想される。今度はドンコではなく、こいつ（敬意を込めて）を放置しておいた釣り人に腹が立つ。スパイクで踏み

潰された哀れな肉体に冥福を祈り、手を合わせる。

背中に受けた励まして

岬先端で一旦荷物を置き、櫛の歯状の溝の様子を伺うために様似港の外防波堤の付け根までぐるっと一回りする。魚がいないと言う情報が正確に伝わっていたのであろう。釣り人は一人も居らず、沖の岩盤で大きくもんどり打って砕け散った波が岸にさらさらと打ち寄せている。深く抉れた縦溝にも横溝にも海草がついている気配がない。

岬先端に戻り一応竿を出す。ここにも海草が見えず、彼方此方に打ってみるが竿は一度もお辞儀しないまま時間だけが過ぎて行く。さらに移動しようと荷物を片付け、移動場所を確認していた時に遠くから吉井氏がやって来た。

「アブラコとソイを釣ったが5本揃わない」と嘆く。

「アブラコがいるならよい。わたしはこのとおり」とチビハゴトコとチビアカハラの悲しい釣果を差し出す。

吉井氏は哀れに思ってくれたのか竿と三脚を持ってきて、確認した移動場所に設置までしてくれた。吉井氏が三脚を設置した所はなんだか狙う方向もバッチリで所々に昆布根が見え隠れしている。潮が足元を洗うが、立ち込んでの最後の奮闘を誓う。

吉井氏の厳つい温かみのある背中を見送った。「最後まで頑張れ」と何度も振り返って掛けてくれる吉井氏の声が届かなくなったころ、ガタガタッと竿が持ち上がった。35cm程のカジカが大口を開けて上がってきた。続けて33cm程が2匹来てくれた。

山甲巡り

空が茜色になり、待望の日の出だ。海面が太陽の光で赤く染まり、私の影が長く伸びた。さっきまでの寒さが嘘のように体が火照ってきた。

何とかカジカをもう1本と真剣に打ち返していると、背後でガチャガチャと音がする。ドキッとしながら振り向くと、地図を片手に海況を眺めている御仁がいる。声をかけると札幌明釣会の方で「今日はさっぱりなので、次回のために海況を観察している」とのことである。

自分のまわりをゆるやかに時が流れる。

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」(古今集、藤原敏行)

「年々歳々花相似たり、歳々年々人不同」

遅い日の出の後はさっぱりアタリも途絶え9時になった。片付けるには少し早い、私も次回のためにエンルム岬を一回りすることにする。

♪「あなたが 　いつか 　教えてくれた 　岬をめぐり 　幸せそうな・・・」

本日はやけに喉が乾く。用意した飲み物は早いうちに飲み切ってしまった。岬めぐりの途中にある壊れそうな倉庫前で水道の蛇口が見えた。水が出ることはないだろうなど思いながらも試しに蛇口を捻って見ると水が逆(ほとぼし)る。決して釣り人のためにある

のではなく、漁具などを洗うために設置してあったものだろう。勝手に使わせていただいたお詫びとお礼を心の中でつぶやく。

先程の明釣会の御仁が反対方向からエンルム岬をぐるっと一回りして来た。

♪「岬めぐりのバスは走る」

近頃の釣りのことなどを話ながら帰途につく。会所前バス停に荷物を下ろす。まだまだ時間があるので、再び吉井氏を迎えに行く。今度は山岸氏、谷口氏が現れる。やはり港の中では魚がいなかったということである。

5本そろわなくても

もう10時になろうとしているのに吉井氏がまだ竿を振っている。吉井氏のバックンを覗く。なっ、なんと45cmを越えるアブラコ2本と40cmに届きそうなソイが収まっている。確かに5本揃っていないが、大物3本には驚いた。ソイと言ってもせいぜい30cmに満たないものだろうと多可を食っていたがでっぷりとした見事なソイには恐れ入った。こんな砂浜にソイやアブラコとは？ 聞くと、この砂浜の100m程沖に根があるという。私にはとてもとても届きそうにない。エンルム岬の先から吉井氏の方を眺めていた時に、海に入って釣りをしているのは鮭釣りの御仁と思っていたが吉井氏であったのだ。よく見るとウェイダーの中が濡れている。海の中を行けるところまで行って遠投した。その時に濡れたものだという。吉井氏はさすがにすごい。

審査結果

優勝	吉井 博	1210点 (アブラコ460mm+ソイ 378mm+3720g)	エンルム
準優勝	前野達志	1085点 (カジカ 410mm+アカハラ410mm+3650g)	琴 似
3位	鹿島釣狂	1059点 (カジカ 378mm+アカハラ337mm+3440g)	エンルム
4位	西川紘一	1037点 (カジカ 365mm+アカハラ344mm+3280g)	冬 島
5位	嵐 光博	982点 (カジカ 380mm+ハゴトコ258mm+3440g)	下 近浦
身長優勝	大前健治	44.5cm (カジカ)	上 近浦

医家釣童

審査会場では、先に到着していた札幌医家釣魚クラブの審査が終わり、その若い会員が50cmものアブラコをぶら下げて私に近づいてきた。たまげて見入っていると、その方が「鹿島釣狂さんですか。『北海道のつり』でよく拝見しています。」と、声をかけてくれる。本日の釣果についても聞かれ、情けない顔をしていると

「アブラコ貸しますか。」とくる。

「審査が終わるまで貸してくれ」と合わせる。初対面にもかかわらずこんなジョークを交わせるのも釣りを愛する者同士という気安さからであろう。

私たちの審査も終わり、吉井氏の優勝を祝してビールで乾杯していると、その御仁が再

び現れる。

「審査の結果はどうでしたか。」 私は1本の指を立てたかったが3本の指を立てた。

「昨年度はどうでしたか。」 面はゆさもあり言うのをためらっていると、釣遊会の仲間が年間優勝だと告げている。

「それはおめでとうございました。これからの号の『釣れ釣れなるままに』に載りますね。楽しみにしています。わたしも実は昨年度、年間優勝を果たしました。」

お名前を伺うと、札幌医家釣魚クラブの氏家氏である。この名前は「北海道のつり」でよく拝見する名前である。

また、その詳細については『フイツシングセラピーと優勝のための精神療法』として「北海道のつり」2001年11月号に掲載された。

お互いのこれからの健闘を誓い合って、がっしりと握手を交わした。温かな手であった。この手が大物を幾度となく握った手なのかと心がチカチカと発光した。そして、その幸運が私にも巡ってくるようにと再び手を強く握りしめた。

終わり